

## 8 天災・災害

当地は昔から水利の便のよくない所が多く旱害をうけ易く、吉野川沿は遊水地帯があつて洪水の度毎に水害を被り、暴風で家屋の倒壊も記録に残っている。

明治十七年八月大風雨で倒壊家屋七、死者二、負傷者数名とある。

明治十八年六月気候不順大凶作で百三十人を救助、同年八月九月赤痢大流行とある。

明治二十九年大暴風雨で御下賜金があり、明治四十年から大正元年まで、毎年秋に大洪水で田畑冠水、谷筋の田畑流失。

明治四十二年、辻渡船の遭難、十数名死亡。

大正元年二年二三毎年大旱害、植付できず作物も枯れて大凶作。

大正三年四年秋、大洪水で小見橋流失。大正六年十二年まで毎年洪水で屋間の島は冠水。

大正七八年は流行性感冒大流行、家毎に病人があり、中には一家全員病床に臥し、死亡が多く火葬場がいそがしくて困ったと伝えられている。

大正十三年またまた大旱害、植付できず大豆の代作をしたが、食糧不足の農家が多い。

昭和七年布屋の渡で渡舟の遭難、死者数名。

昭和九年蘭備暴落大旱害、室戸台風の被害甚大。

昭和十三年大洪水のため各谷川の護岸流失増川校庭二百坪流失。

昭和十六年から毎年洪水にみまわれているが昭和二十年の枕崎台風の大洪水は近年稀な大きなもので、辻渡

し行きの県道を大きく越え、無数の

流木が北佐古下に押し寄せた。

天神の県道が喜来谷の水で谷

川のように荒され、金屋谷が砂礫

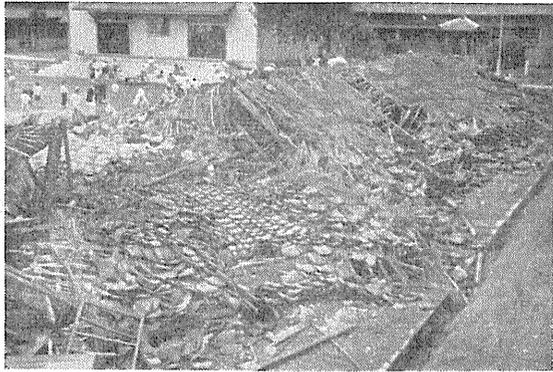
谷を押し出し、伊月谷が田畑を埋

めたのも、戦時中乱伐、松根掘り

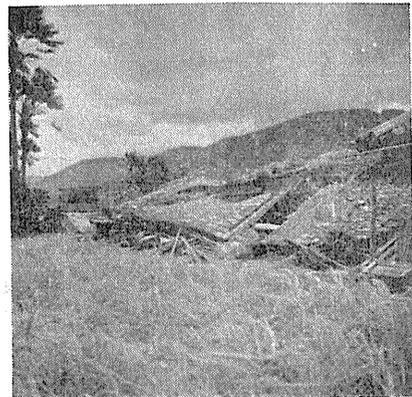
で、山が荒された結果である。

昭和二十五年六年の台風も山崩

れや増川校の運動場を流失、校舎



昭和二十九年



昭和二十九年

の石垣をくずして教室の床が傾いた。

昭和二十九年の台風は足代小学校の旧校舎を倒し、美濃田、山口等の家屋を倒し、屋根をとばし、山林の大きな大木を無数に倒し、ねじ折り、鷲羽神社の大木をなぎ倒し中村の石の地藏を吹倒している。増川、東山、足代の山林は莫大な損害を被った。

昭和三十一年から三十二年までは幸い台風からまぬがれ、久しぶり三年連続の大豊作である。

## 9 治 水

吉野川は毎年二三回大洪水で、昼間の島は冠水、相当の被害を受けるが宿命のように半ばあきらめている。しかし護岸については、昔から長年の努力をつづけて来た。記録によると明治二十五年田ノ岡下ノ堤防工事を開始し、二十六年には轟の護岸、二十九年大坪の護岸や岡田、井ノ口、轟、新開、西ノ久保の護岸の大修理、三十年はなの木護岸の補修、三十一年三十二年に新開から大舟戸に至る護岸の修築等である。

小川谷も度々修築したが洪水の度に被害を受け、戦後東岸護岸と西岸護岸ができ、上流の内野谷は地すべり防止をかねて大堰堤が戦後つくられた。増川校前の護岸も戦後二回築きかえて現在に至っている。

足代の黒川原谷は、明治二十七年頃は河床も高く、現在の地神さんと同じで、出水時には十王堂、西原や、西岸にあふれ、それを防ぐため村民は大騒動したものである。現在でも兩岸の畑地は黒川原の砂地なので、往時を偲ぶ事ができる。特に県道南の西岸はむざんな程の荒地にかわった由、足代村でも村費、県費を随分つき込み、明治四十一、二年頃西岸川沿に護岸を兼ねて九尺道をつくり、東岸にも護岸をしたが、大正初期の大荒は物すごく川沿の畑をまたまた川原にした。大正四、五年頃から十年頃まで多大の県費で護岸を築き、大正十二年から十四年頃までに大堰堤を築いたので、黒川原谷の水害も漸く防がれた。

黒川橋も昭和四年現在の橋となったが、それまでは低い粗末な木橋で、少し水が出ると流失したので、学童たちは父兄の手にすがったり背負われて通学した。上流の谷岐附近の大堰堤は戦後地すべり防止を兼ねて築造されたものである。

馬来谷は兩岸を深く崩して行く谷で、昭和三十一年堰堤や護岸が完成した。

西谷も馬来谷のような性格の谷であったが昭和三十二年県道まで河床と護岸工事が完成した。

伊月谷も河床が高い谷であったが、昭和二十八年護岸工事が完成。

喜来谷も戦後堰堤、護岸が完成した。

足代東浜や開地の吉野川の護岸も戦後完成したものである。